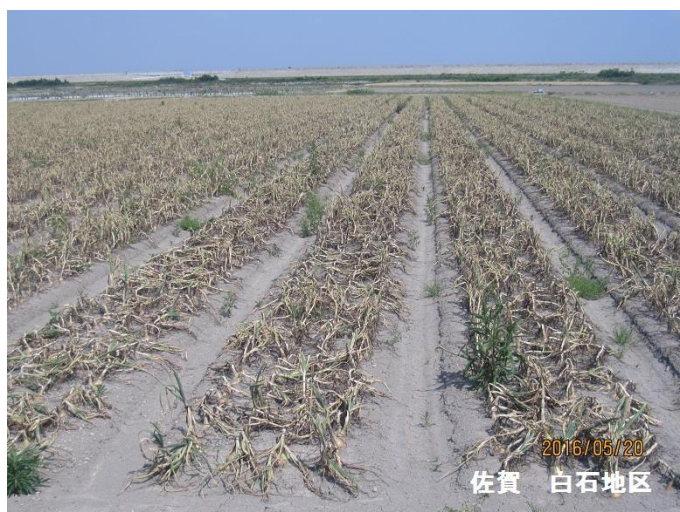


# たまねぎレポート【343号】



平成28年5月26日

阪南青果株式会社

## 社内報

4月の平均気温は、全国的に高く、東・西日本と沖縄・奄美ではかなり高かった。降水量は、全国的に多く、西日本の日本海側と沖縄・奄美ではかなり多かった。長崎県北部では、月間降水量の最多を更新した地区もあった。日照時間は、東日本の太平洋側と西日本で少なかった。北日本と東日本の日本海側、沖縄・奄美では平年並みであった。5月は全国的に気温の高い日が多く、九州地区は高温多湿の日が多く、玉葱に病害が多発生した。20～22日の北海道の道東地方では、30度を超える真夏日となった。

気象庁が発表した6～8月の3ヶ月予報によるとこの期間の平均気温は北・東日本で平年並み亦は高く、西日本、沖縄・奄美は平年より高くなる見込み。降水量は西日本の太平洋側で平年並み亦は多い。月別予報は次の通り。

6月、北日本と東日本の日本海側では、月前半は天気は数日の周期で変わる。月後半は平年と同様に曇りや雨の日が多い。東日本の太平洋側、西日本と沖縄・奄美では、平年と同様に曇りや雨の日が多い。気温は、北・東。西日本で平年並み亦は高く、沖縄・奄美は高い。降水量は西日本の太平洋側で平年並み亦は多い。

7月、北・東日本では、平年に比べ曇りや雨の日が多い。西日本では、期間の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、後半は晴れの日が多い。沖縄。奄美では平年と同様に晴れの日が多い。気温は、沖縄・奄美では平年並み亦は高い。降水量は、北・東・西日本で平年並み亦は多い。

8月、北日本では、天気は数日の周期で変わる。東・西日本と沖縄・奄美では、平年と同様に晴れの日が多い。気温は、東日本で平年並み亦は高い。西日本と沖縄。奄美は高い。降水量は北日本で平年並み亦は多い。

## 需要(市場)の動き

### 野菜の概況

4月の主要市場の野菜の入荷は、5地域のいずれの中央卸売市場も前年を上回った。平均単価は何れの市場も前年を下回った。市場別では、札幌市場は前年比117%の入荷で、平均単価はkg¥199前年比87%。東京市場は前年比103%の入荷で、平均単価はkg¥267前年比94%。名古屋市場も前年比103%の入荷で、平均単価はkg¥242前年比93%。大阪本場は前年比106%の入荷で、平均単価はkg¥255前年比93%。福岡市場も入荷は前年比106%、平均単価はkg¥184で前年比91%となっている。

玉葱の入荷は市場毎にバラツキきはあったが、何れの市場も前年を上回り、平均単価は何れの市場も前年を下回った。市場別では、札幌市場の入荷は5,081トン前年比131%で、平均単価はkg¥66前年比65%。東京市場は14,423トン前年比101%の入荷で、平均単価はkg¥87前年比77%。名古屋市場は6,353トンの入荷で前年比121%、平均単価はkg¥75前年比74%。大阪本場は4,566トンの入荷で前年比125%、平均単価はkg¥82前年比68%。福岡市場は3,312トンの入荷で前年比106%、平均単価はkg¥84前年比79%となっている。

日本農業新聞社が集計した、全国主要7地区の代表荷受7社の、主要野菜14品目の4月の販売量は、83,654トン前年比108%(前月比108%)。平均単価はkg¥168前

年比91%(前月比92%)となっている。販売量が前年比増となった品目は、ピーマン(前年比130%)、キュウリ(〃123%)、ナス(〃121%)など11品目。前年比減は、ニンジン(前年比92%)、サトイモ(〃94%)、キャベツ(〃99%)、など3品目。価格が前年比高となったのは、サトイモがkg¥302で前年比18%高、ニンジンがkg¥149で17%高ネギがkg¥375で13%高、バレイショがkg¥228で13%高、など4品目。前年比安となっているのは、キュウリがkg¥241で前年比27%安、レタスがkg¥158で25%安、ピーマンがkg¥391で25%安、タマネギがkg¥78で24%安、など10品目となっている。

東京都中央卸売市場の4月の野菜の入荷は、131,562トン前年比103%(前月比107%)であった。主要品目で前年比増となったのは、ナスが前年比137%であったのを始め、キュウリが前年比118%、ピーマンが前年比117%、など10品目(前月は8品目)。前年比減となったのは、キャベツの前年比94%を始め、ニンジン、サトイモが前年比95%など6品目(前月は7品目)。平均単価はkg¥267前年比94%(前月比103%)で、上旬¥272、中旬¥267、下旬¥264と日を追って軟化した。主要品目で前年比高は、バレイショとネギが前年比118%、ニンジンが前年比116%など5品目(前月は12品目)。前年比安は、キュウリが前年比72%、レタスが前年比76%、ハクサイ、玉葱が77%など9品目(前月は3品目)であった。

## 東京都中央卸売市場の4月の入荷量と単価

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	前月比 (%)	単 価 (¥/kg)	前年比 (%)	前月比 (%)
野 菜 総 数	131,562	103.0	106.6	267	94.2	96.4
た ま ね ぎ	14,423	100.6	113.4	87	77.2	91.6
キ ャ ベ ツ	17,489	94.2	104.1	115	89.2	127.8
だ い こ ん	10,804	97.6	93.7	104	86.4	110.6
レ タ ス	7,946	107.1	109.0	213	75.7	76.3
ば れ い し ょ	7,876	98.0	117.7	238	118.2	110.2
ト マ ト	7,844	114.1	135.1	403	88.9	77.5
き ゆ う り	7,731	117.7	117.9	263	72.0	78.3
に ん じ ん	7,313	94.7	94.1	163	115.8	140.5
は く さ い	6,026	107.3	90.8	98	76.9	89.1
か ぼ ち ゃ	3,081	105.0	98.1	126	77.8	87.5
な が い も	897	93.1	100.3	382	116.6	103.8
れ ん こ ん	417	100.4	59.2	816	103.6	120.7
に ん に く	322	109.7	90.2	1,074	101.6	109.3

### 玉葱の概況

#### 東京市場

東京都中央卸売市場の4月の玉葱の入荷量は、14,423トン前年比101%（前月比113%）で順調であった。前月に続き、北海道、長崎物が前年比増、佐賀物が前年比減であった。北海物は、7,798トンの入荷で前年比118%、占有率は54%で前年比8ポイントアップ。佐賀物は、5,312トンの入荷で前年比86%、占有率は37%で前年比6ポイントダウン。長崎物は、462トンの入荷で前年比146%、占有率は3%で前年比1ポイントアップ。平均単価はkg¥87前年比77%（前月比92%）であった。産地別の価格は、北海物はkg¥78で前年比77%、佐賀物はkg¥96で前年比78%、長崎物はkg¥87

で前年比66%であった。

5月に入り、北海物から府県物への移行が進んだが、主力産地佐賀物は、小振りで2Lの比率が低くなり、市況は2Lから回復歩調となった。佐賀産地の不作情報は入手していたが、さほど深刻には受け止めていなかった。昨秋以来、北海物が潤沢に出回り安値相場が続いていたので、府県物主力になれば需給は改善され、「相場は平年の水準に回復する」程度の認識であった。上旬は佐賀物の入荷は前年比5%程度減少したものの、球流れは平年並みで遜色がなく、北海物の残荷などが潤沢で販売量は前年を上回り、市場関係者の間で品薄高を予感する状態ではなかった。中旬には、主力の佐賀物の球流れが、急に小粒化し2L、Lの比率が低下し、M、Sの比率が上昇し、入荷量は日毎に減少傾向となった。兵庫物の入荷も前年を下回ったが、球流れは大粒で2L、Lの比率が高く、豊作型を印象づけた。相場は兵庫物と佐賀物の品質差を反映して価格差が広がった。関東産地も無病息災ではなかったが、病害は比較的軽く近郷の千葉物の入荷も始まった。中旬の入荷量は前年をかなり下回ったものの、市場には深刻な品薄ムードは見受けられなかった。今週になって、産地の大凶作情報に加えて入荷が激減し、品不足が深刻化して来た。佐賀産地に出荷を要請しても、入荷は減少の一途で、兵庫は関西市場重点の出荷で、京浜市場向けの出荷は消極的で指値が高く、積極的な取り組みは出来なかった。近年、香川、愛知物の入荷も少なく、栃木、群馬等の関東産地物の入荷も少量にとどまっている。此処に来て市場関係者の間にも品不足の深刻さが認識されつつあり、数量確保に四苦八苦の状態である。

### 名古屋市場

名古屋中央卸売市場の4月の玉葱の入荷量は、6,353トン前年比121%(前月比95%)であった。依然北海物主力の販売で北海物は、4,218トンの入荷で前年比127%、占有率は66%で前年比2ポイントアップ。愛知物が1,923トン前年比123%、占有率は30%で前年と同じ。静岡物が78トンの入荷で前年比44%、占有率1%で前年比2ポイントダウン。平均単価はkg¥75前年比74%(前月比89%)で総じて弱保合で推移した。産地別では、北海物はkg¥69で前年比78%。愛知物はkg¥83前年比67%。静岡物はkg¥91で前年比81%となっている。

5月に入って、北海物が終了し、愛知物がピークを迎えたが、入荷は意外に少なく、品薄傾向であった。佐賀産地の不作情報は入手しているものの、従来から佐賀物の販売は殆どなく、市場には逼迫感はなく、前年比安の相場が続いた。愛知物の球流れは、2L60%、L25%、M15%で平年作並みであった。他市場の高値相場を受けて、地場JAからの要請で、他市場に追随すべく、値上げ販売を試みているが、需給は均衡状態で、買参人に品薄感はなく引き合いは今一つで、対策に苦しんでいる。量販店が産地事情を認知し、売値値上げに踏み切るには時間が掛かりそうだ。既に愛知物はピークを過ぎており、北海物が出回るまでは兵庫物主力の販売になる。兵庫物を販売するには、関西市場の価格水準に並ぶことが必要で、少量ながら指値販売に努めている。

### 大阪本場

大阪市中央卸売市場本場の4月の玉葱の販売量は、4,567トン前年比125%(前月比87%)で引き続き増加傾向であった。産地別では、北海物と兵庫物が大幅増で佐賀物は大幅減であった。例年と異なり4月も北海物が主力で、北海物のお荷は2,328トン前年比232%、占有率は51%で前年比24ポイントアップ。佐賀物の入荷は、1,003トン前年比59%、占有率は22%で前年比25ポイントダウン。長崎物の入荷は829トン前年比133%、占有率は18%で前年比1ポイントアップ。平均単価はkg¥82前年比68%(前月比93%)で弱保合で推移した。産地別では、北海物はkg¥72で前年比70%、佐賀物はkg¥91で前年比72%、長崎物はkg¥96で前年比79%となっている。

5月に入り、北海物の販売は終了し、佐賀、兵庫物主力の販売となり、新物の引き合いが強まり、市況は堅調に転じた。佐賀産地の不作情報と共に佐賀物の入荷が細り、月半ばから相場はうなぎ上りに上昇した。佐賀物は小粒でM、Sが主力、淡路の早生系は大粒で2L主力の球流れで、市況はL高、2L安の状態が続いた。月後半には、佐賀物は集荷難で入荷は激減し、淡路物の集荷に傾注するも、先高市況を見越した生産者は、収穫先送りに徹し、JA、商系の何れにも品物が集まらず、入荷は増えず引き合いは活発で、需給はタイトで市況は日々品薄高を更新している。大阪を始め関西市場は、全国に先駆けけた相場の急騰で仲卸段階では、量販店や給食等の業務向けの販売に逆鞘現象が発生している。

## 福岡市場

福岡市中央卸売市場(福果)の4月の玉葱の販売量は、3,312トン前年比106%(前月比83%)で前年比増、前月比減であった。主力は依然北海物で、北海物の入荷は1,739トンで前年比178%、占有率は53%で前年比22ポイントアップ。不作の佐賀物は957トンの入荷で前年比76%、占有率は29%で前年比11ポイントダウン。長崎物の入荷は366トンで前年比86%、占有率は11%で前年比3ポイントダウン。平均単価はkg ¥84前年比79%(前月比79%)で、総じては軟調に推移した。産地別では、北海物はkg ¥78で前年比80%。佐賀物はkg ¥84で前年比71%。長崎物はkg ¥104で前年比83%となっている。

5月に入り、佐賀産地の病害被害の拡大情報で、先高が予測されたが、月前半はそれなりの入荷があり、深刻に受け止めていなかったが、月後半には日毎に入荷が減少し、加えてS中心の球流れで裾物が多く、2L、Lの品不足が深刻化した。2L、Lをkg ¥150に値上げして販売量を抑制し、割安のM、Sの拡販を試みたが、2L、Lの引き合いが強く品不足が深刻化した。現在、今後の需給バラスを考慮して、kg ¥200の高値販売で需要抑制を試みているが、高値に拘わらず引き合いは強い。九州管内には、佐賀物の不足を補足する産地はなく、6月は更なる品薄高が予想され、兵庫を始め四国物の集荷に取り組んでいるが、いずれの産地も集荷環境が厳しく苦慮している。

### 5月26日(木)の建値市場の玉葱市況は次の通り

#### 【札幌市場】 入荷153 トン、強保合

北海道 20kgDB2L ¥2,000~1,800、L大 ¥2,200~1,800、L ¥1,400~1,300。

佐 賀 20kgDB2L ¥2,550~2,300、L ¥3,550~3,300、 M ¥2,500~2,250。

佐 賀 10kgDB2L ¥1,200~            L ¥2,000~            M ¥1,350~

栃 木 20kgNT2L ¥2,200~            L ¥2,900~2,800、M ¥2,500~2,100。

兵 庫 20kgDB2L ¥2,500~

**【太田市場】** 入荷274トン、強い

佐 賀 20kgDB2L ¥2,300～2,200、L ¥2,800～2,700、 M ¥2,400～2,300。

佐 賀 10kgDB2L ¥ ~ L ¥ ~ M ¥ ~ 。

栃 木 20kgDB2L ¥1,900～1,800、L ¥2,200～2,000、 M ¥1,900 ~1,800。

兵 庫 20kgDB2L ¥2,500～2,400、L ¥3,500～3,400、 M ¥3,000～2,900。

北海道 20kgCAL大 ¥2,100～2,000、L ¥1,900～1,800、 M ¥1,500～1,400。

**【名古屋北部】** 入荷218トン、保合

兵 庫 20kgDB2L ¥2,500～2,400、L ¥3,700～3,600、

愛 知 20kgNT2L ¥1,900～1,800、L ¥2,600～2,500、 M ¥2,000～1,900。

**【大阪本場】** 入荷142トン、強い

佐 賀 10kgDBL ¥2,000～1,600、 M ¥1,600～1,500。

兵 庫 10kgDB2L ¥1,600～1,300、L ¥2,000～1,700、 M ¥1,600～1,500。

兵 庫 20kgDB2L ¥2,800～2,700、L ¥4,000～3,800、 M ¥3,000～2,800。

北海道 20kgDBL大 ¥1,800～1,700、L ¥1,500～1,400。

**【福岡市場】** 入荷113トン、保合

佐 賀 10kgDB2L ¥2,000～1,500、L ¥2,000～1,500、 M ¥1,800～1,500。

長 崎 10kgDB2L ¥1,500～1,200、L ¥1,500～1,200、 M ¥1,200～1,000。

兵 庫 20kgDB2L ¥3,000～ L ¥3,700～

**供給(産地)の動き**

府県産の主力産地佐賀、兵庫(淡路)では、5月のべト病の2次伝染が猛威を奮い、過去に経験のない甚大な病害が発生した。3月の1次感染は懸命な防除が効を奏し4月には沈静化したと見られていたが、その後の高温多湿の気象の影響で、5月には2次伝染が、西日本の玉葱産地を網羅した。何れの産地も懸命の防除に努めたが、薬石効なく予想外の被害に見舞われた。府県の28年産の玉葱は予想に反し、大幅な減収となり、6～10月の出荷は当初計画の前年比116%から下方修正、前年比70%台に落込み、当初計画比の60台に減少することになる。6～7月の出荷量は過去に例を見ない少量となり、



品薄高となった昨年の夏高相場を上回る深刻な玉葱飢饉が到来すると予想される。

北海産玉葱は、前年大豊作であったことで、28年産の7～10月は前年比80%前後の出荷を計画しているが、播種、育苗、定植が極めて順調に推移しており、7～8月の肥大期に高温早魃に見舞われなければ昨年同様の豊作が期待され、7～8月の出荷は昨年並み亦は昨年を上回る。6～7月市況の異常高値を受けて、出荷は大幅に前進化するものと予想している。

輸入は、4月までは前年を大幅に下回ったが、高値が続いていた国際価格も、昨今では沈静化の傾向にあり、既に輸入商社は各国産地の需給動向を考察しながら、積極的な輸入商談を展開しており、6月からは前年比増に転じると予想されるが、8月までは中国以外に輸出余力のある国は少ない。

以上の産地動向から、6～7月市況はかつてない深刻な品不足から異常高値が続くものと思われる。沈静化するのには、北海物の出荷が軌道に乗り、輸入物が増加する8月後半になると見ている。

### 府県産地

現在、府県産地の出荷は早生が終盤を迎え、中晩生に移行している。主力の佐賀、淡路を始め、愛知、大阪、和歌山、香川など中小産地の多くが出荷の最盛期を迎えている。しかし、何れの産地にもベト病が発生し、被害の大きさは産地によって大きく異なるが、日本海側以外の産地は不作である。特に、佐賀県では未だ経験のない大病害が発生し、数日で生育が激変した。中心産地である白石地区の惨状は目を覆うばかりである。白石地区内でも、壊滅状態の圃場もあれば7分作の圃場もあるが、平均的には、半作以下(昨年は8分作)で、収穫を断念して鋤返している生産者も少なくない。今年度、白石町の肝煎りで白石町野菜病害虫防除推進協議会が設立発足し、病害虫の発生予報を始め、防除作業の徹底を呼び掛けて来た。3月には罹病株の抜き取り作業や薬剤の一斉散布など、例年になく防除の徹底に努めたことで、3～4月の1次伝染は、昨年より軽症にとどまったが、5月の2次伝染では降雨など天候不良の影響もあり、防除が阻まれ、ベト病で葉鞘が枯死し葉面が暗黒色に染まり、目に余る惨状を呈し病害が深刻化した。佐賀玉葱栽培史上経験のない大凶作である。罹病株の抜き取りも、薬剤散布も効果がなかった。と

嘆く生産者が続出した。農薬散布が重なり、薬害と見受けられる圃場も散見された。麦畑に囲まれた圃場のなかには軽症な畑もあるが、面積的にはごく僅かである。昨年、今年と2年連続の病害で生産者の農業収入が激減し、生産者のなかに来年は栽培を断念するとの声が高い。因みに、当社傘下の佐賀農産の直近1週間の球流れは、2L1%（前年5%）、L19%（前年34%）、M30%（前年28%）、S35%（前年20%）、2S8%（前年3%）、B7%（前年10%）となっている。球流れは週毎に小粒化し、6月には2L、Lは皆無になると見ている。

中晩生主力の兵庫県（淡路島）では、早生系は昨年同様の豊作型で、2Lの発生率が50%前後に達し、大粒の球流れであったが、中晩生は4～5月の高温多湿の天候や4月の数度に亘る強風による葉鞘の中折れなどで、べト病や軟腐病の罹病が拡大した。佐賀と異なり淡路では、球肥大がかなり進んだ時点で伝染したことや、従来から育苗時の防除、定植後の罹病株の抜き取りや地域一斉防除が徹底していることで、佐賀に比べると被害は軽い。先日、圃場を見聞した限りでは、島内平均の作柄は8分作前後で、反収5～4トンは確保されると推測した。現在、病害による品質低下を懸念して、早期出荷に傾いている生産者も見受けられるが、市況が日を追って値上がりしていることを受けて、多くの生産者は収穫を一日延ばしにしながら、収量増を図っている。今週末から来週に掛けて、即売で出荷をするか、乾燥貯蔵して出荷を先送りするか、決断をして収穫を始めると見ている。現在の産地相場はMアップ20kg切落とし裸値 ¥2,000～1,800に値上がりしている。因みに当社、津名事業所の5月中旬の球流れは2L47%（前年41%）、L39%（前年48%）、M12%（前年10%）、S2%（前年1%）となっている。6月に入ると2Lが減少し、L中心の球流れになると見ている。

### **北海道産地**

今年の作付けは、約12,700haで前年並みと報告されている。品種別では極早生系が530hで前年比109%、早生系が5,090haで前年比105%、中生系が6,610haで前年比97%、晩生系が450haで前年比92%、在来種の札幌黄は14haで前年比58%となっている。今年度産は播種、育苗が極めて順調で、融雪が早く定植作業は前進化し、活着もほぼ順調で、昨今は温暖で水分が不足気味で降雨を待ち望んでいる生産者が多

い。道東地方では4月末には25cm の積雪があり、5月20～22日の3日間は30℃を上回る真夏日に見舞われたが、生育は順調である。

### 外国産地

4月の輸入は、速報値で、18,232トン前年比62%で、国別の輸入量は、中国が14,568トンで前年比59%。ニュージーランドが3,104トン前年比87%。オーストラリア549トンで前年比138%となっている。6～7月の日本の市場は府県産地の中晩生が病害による作柄不良で、過去にない品薄高相場が予想されることから、6～8月の輸入は増加傾向に転向すると見ている。

現在入荷の中国物は雲南省産から河南省に移行している。この先、順次江蘇省～山東省へと産地が拡大する。輸入価格は値下がり傾向にあり、現在、ムキ玉20kg・C&F価格は\$10を割り込んでおり、府県産の品不足を反映して加工筋の関心が高まっている。作秋以来、北海道産の豊作で減少傾向が続いていた中国からの輸入は、府県産の不作を反映して、商談が活発化し6月からは急増の動きにある。

府県産の不作からニュージーランド物に引き合いが強まり、輸入商談が活発化している。既に現地では出荷は終盤を迎え、輸出余力は乏しくなっているが、6月の輸入はかなり増加すると見ている。現在価格は、多少のばらつきがあるが M アップで20kg・C&F・¥1,400～1,500。

アメリカでは、現在カリフォルニア物が出荷されているが、現地価格が50¢ \$10を上回る高値水準にあり、青切りで貯蔵性が低く、輸送面で難があり輸出には適さない。

### 6月の市況見通し

府県物は、佐賀、兵庫（淡路）の2大産地を始め、西日本の殆どの産地が病害に見舞われ、5月後半からの出回り量が急減し、市況は日々上昇傾向を強めている。相場の急騰で量販店向けや加工筋では、通常納入価格が先行していることで、仕入れ価格と納入価格に逆鞘現象が発生している。今年、府県産は早生系の作柄が良好だったことで、中晩生の病害に関しては、実態の把握に産地側と市場側ではかなりのズレがある。此の先、6月の需給は更にタイトになり、通常年では、府県産玉葱

の6月市況は、産地の揃い踏みで潤沢に出回り、シーズン中の安値月となるが、今年は今までにない品不足で昨年を上回る異常高値となり、シーズン中の高値月となる。品不足が深刻化して、荷受各社は集荷に、量販店は欠品回避に厳しい局面を迎える可能性が強い。此の先、市況はうなぎ昇りの状態が続き、20Kg・Lサイズの高値¥4,000～4,500が見込まれるほか、7月は更に一段高の相場展開となる可能性が強い。此の時期としては今までに経験したことのない玉葱の飢饉状態が予想される。

産地からは、今年の玉葱相場は青天井の声が聞こえるが、過度の高値は需要の減退を招き、急落の可能性もある。要は過熱は禁物で、消費者の目線に立ち、需要動向を考察し、適切に対応することが肝要である。(了)